

令和7年度 第1回 アール医療専門職大学

教育課程連携協議会 議事録

開催日 : 令和7年10月15日(水) 14:00～15:10
開催場所 : アール医療専門職大学 体育館・講義棟 1階
出席者 : 浅川 育世(茨城県理学療法士会)
大場 耕一(茨城県作業療法士会)
山倉 敏之(筑波記念病院)
宮山 敬子(茨城県教育研修センター)
大野 崇(行方市介護福祉部介護福祉課)
中 徹 (アール医療専門職大学学長)
新田 収 (アール医療専門職大学リハビリテーション学部長)
縄井 清志(アール医療専門職大学理学療法学科長)
中村 茂美(アール医療専門職大学作業療法学科長)

【記録：事務局】

1. 議題

- (1) カリキュラムの改訂について
- (2) 臨床実習の進捗状況について
- (3) 令和7年度前期における選択科目履修状況および現在のGPA状況について
- (4) 今年度の就職内定状況について
- (5) その他質疑応答

2. 配布資料

- ・ 令和7年第1回アール医療専門職大学教育課程連携協議会 次第
- ・ 教育課程連携協議会について
- ・ 教育課程連携協議会 構成員一覧
- ・ 2025年度理学療法学科臨床実習について
- ・ 2025年度作業療法学科臨床実習について
- ・ 選択科目履修状況・前期GPAについて
- ・ 2025年度リハビリテーション学部就職状況

3. 議事

会議の冒頭、中学長より挨拶があった。また、新田学部長が進行を行い、構成員より自己紹介を行った。

(1) カリキュラムの改訂について

○縄井学科長より、来年度以降のカリキュラムについて口頭説明があった。完成年度である来年の4月から新カリキュラムを検討していたが、科目の調整等が難航している。そのため、1年間延長してカリキュラムの改定を進めることとした。変更を考えているのは講義科目15コマ30時間分。現在は134単位が必須であるが、教員・学生の負担が大きいため、減らすことを検討している。

(2) 臨床実習の進捗状況について

○縄井学科長より、資料「2025年度理学療法学科臨床実習について」の説明があった。

【大場様】

指導者からのパワハラがあった実習先には、次年度以降も実習を依頼するのか。

【回答（縄井）】

今後検討する。施設の責任者の方はよく対応してくださり、事情をしっかりと把握した上で指導者を変更して頂けたため、施設自体に問題があるわけではない。そのため、個人的には該当施設には今後も受け入れをお願いしたいと考えている。

【大場様】

パワハラがあった事実が、下位学年に噂で広まることも考慮し、学生が不安を感じないように、数年間は依頼しないほうが良いのではないかと考えている。該当施設に実習に行く学生に不利益が生じないようにする必要がある。

【浅川様】

パワハラにて通学ができなかった学生は、大学での継続指導の結果合格であったのか。

【回答（縄井）】

足りない部分は、高田先生の施設を土曜日に4.5日開けて実習を行った。また、学内でも実習を行い、合格した。

【山倉様】

1 年次の通所・訪問リハビリテーション実習は 29 名受講しているが、これは 1 年生が全員で 29 名ということか。

【回答（縄井）】

その通りである。

○中村学科長より資料「2025 年度作業療法学科臨床実習について」の説明があった。

【浅川様】

「記録する環境が十分でない」との学生の感想があるが、オンラインで教員も同時に閲覧ができるシステムが機能しないということか。

【回答（中村）】

学生が PC で入力するにあたり、病院だと Wi-Fi 環境が使用できない事象が多数あった。スマホも繋がりにくいこともあり、1 時間早めに帰宅させてもらい、自宅で入力する学生もいた。実習指導者の中にも、病院内で内容を確認するのが難しい方もいらっしまった。問題なく Wi-Fi が使用できる環境の施設は、即日全員が内容を確認でき、スムーズに意見交換ができた。

【新田】

どの程度の施設がシステムを利用されているのか。

【回答（縄井・中村）】

PTOT とともに大多数がシステムを利用しており、PT1 施設、OT 数施設のみ紙ベースでの報告を行っている。

【大場様】

コミュニケーションスキルについての課題は、学年が下がるほど多く出てくる印象がある。また、利用者様へのフランクな対応について。核家族化が進み、祖父母との関係性が希薄になっているなど様々な理由があると思う。選択科目に「マナー接遇」があるが、PTOT の先生が対応するのか。

【回答（中村）】

学内のビジネス系の先生に対応いただいている。敬語やお礼状の書き方等の一般的なマナーは教えていただいているが、実践となると難しいようだ。

【大場様】

学内ではなく、学外の手職種の方に指導していただくのもよいのではないかと。指導に関しては、ハラスメント等の問題や、時代の変化もあり、学生との接し方も難しくなっていると感じている。

【縄井】

通信教育で高校時代を過ごしてきた方への対応が難しい。支援学校でコミュニケーションスキルについて、具体的にどのような指導を行っているのかご助言いただきたい。

【回答（宮山様）】

絵で分かりやすく説明されている教科書を使用している。学生だけでなく、新規採用の先生にも言えることだが、接遇をこれまで学んできていない。また、コロナ禍の時代の子供たちはコミュニケーションスキルが落ちている傾向があると感じる。

もう一つは、BWAP2 という心理テストの就労版を使用している。発達障害の方向けだが、一般の方も利用できる。就労支援に活用でき、自己採点、他者採点が可能。就職するにはどの程度解ければ問題ないかという指標もある。現在無料でダウンロードでき、紙面に印刷することができる。

【新田】

コロナの影響により、高校へ通学していない世代であることも、コミュニケーションスキルに影響があると感じている。学内においても、クラスメイト同士の関係も希薄に感じる。その状況ではじめての患者さんとコミュニケーションを取ることは難しいのではないか。大学でも取り組みを考えなければならない。

【山倉様】

臨床実習Ⅰの学生の感想にある「コミュニケーションスキルについて具体的に学習されていた。」というのは、学生側が1年の時より具体的に指導されたと感じているということか。

【回答（中村）】

2年生からの実習後の振り返りでは、受けた指導の具体的な内容や実習で実践した活動についての詳細な感想が多く聞かれた。

実習期間（5日間）とスーパーバイザーは1年次と同じであったものの、学生が1年次よりも深い知識を持って臨んだことで、結果としてより多くのスキルや学習内容を習得できたことが伺える。

1年次の学生も概論などでコミュニケーションについて学ぶが、実習先ではまだ学生感覚でのコミュニケーションに留まっている。しかし、2年次の実習になると、職業人としての役割認識を持って、コミュニケーションが取れるようになる。

【山倉様】

1年後期以降のカリキュラムの狙いによるものなのか、学生自体の意識の変化の問題なのか確認したかった。通所・訪問リハビリテーションの後1年生の後期の生活が非常に重要になってくると確認できた。

【回答（中村）】

様々な要因があると思うが、学生自体の意識が変わったと感じる。

【浅川様】

OSCEを取り入れてるのか。取り入れてるのであれば、コミュニケーションスキルに関してOSCEで改善しないのか。

【回答（縄井・中村）】

通所・訪問リハビリテーション実習から臨床実習まですべての実習前にOSCEは取り入れている。

標準予防策・コミュニケーションの二点を確認している。あらかじめ学生たちに指導を行うため、手順通りに行うことはできるが、最低限のレベルがクリアできているかの確認に留まっている状況。

実習から戻ってくると、Pre-OSCEと比較し簡潔に、濃い内容でコミュニケーションが取れるようになっていくと感じる。

【宮山様】

自分のスキルと、社会から求められているスキルとの乖離は、自分で気付かないとなかなか直せない。実習での失敗を成長につなげていくと思うが、実習後の振り返りはどのように行っているのか。

【回答（縄井）】

臨床実習後には報告会を行う。その他に基礎理学・作業療法学の授業の中に早期体験実習がある。体育館に一般の高齢者に来校頂き、体力測定等を行う。その後に振り返りの時間を設けている。その際は、普段あまり発言しないような学生も反省点についてたくさん話をしてくれ、内的変化が読み取れる。このように失敗を受け入れて成長している。グループワークについてもあまり口出しはせず、失敗しながら学んでもらうような取り組みをしている。

【回答（中村）】

実習指導者がつける採点と、学生の自己評価に乖離がみられる場合がある。学生の考える価値基準と社会の基準が異なることが原因だと考える。実習後には一人ひとり面談を行い、なぜそのような評価がついたのかを、各担任が丁寧に説明している。その面談により次の半期の目標を学生と設定する支援を行っている。このような個人面談を半期ごとに実施している。

【宮山様】

良かった点（グッドモデル）についてもフィードバックできるとよいと思う。

【回答（中村）】

指導者の方は、よい点はとても評価してくださる。担任もよかった点を先に伝えて、その後に改善点を学生に伝えるようにしている。

【宮山様】

良い点も悪い点も、なぜそのような評価だったのか深堀をしていき、貴重な意見をフルに生かせるとさらに良いと思う。

(3) 令和7年度前期における選択科目履修状況および現在のGPA状況について
新田学部長より、資料「選択科目履修状況・前期GPAについて」の説明があった。

(4) 今年度の就職内定状況について
中村学科長より資料「2025年度リハビリテーション学部就職状況」について説明があった。

【大場様】

「就職に消極的な学生」というのは、就労に対して消極的なのか、国試のハードルを懸念して消極的なのか。

【回答（中村）】

実習にて経験した内容が学生の想像を超えたものであった。職業内容の煩雑さや忙しさを経験し、「この仕事をやっていけるのか」と弱気になった学生が複数名いた。専門学校の卒業生を講師として連れてきて、前向きに取り組めるように対応していく予定。また、国家試験に安心して合格できるラインに達していない学生が、どのタイミングで就活を始めるのかを心配している。

【大場様】

1期生で、先輩からの情報がないから国試や就職に対して不安な学生も多い、ということも考えられるか。

【回答（中村）】

親に勧められて入学した学生が、この実習後のタイミングで「本当に医療の道に進んでいいのか」と悩み始めた。しかし、現在は気持ちを切り替え、前向きに就労を考え始めている。

【大場様】

卒業後のフォローを検討中とのことだが、卒後教育についてなのか、カウンセリングについてなのか。

【回答（中村）】

継続的に就労できているかを確認し、できていない場合にフォローをする必要があると考えている。どこまで教員が介入するのかを検討していく。

【大野様】

国試対策として集中して行っていることはあるのか。

【回答（新田・中村）】

国試対策の委員会を設けている。全国順位が出る業者模試も実施。過去問を使用した模試も実施し、過去問の解説を継続して行う。また、学生をグループ分けし、各教員が4人程度受け持ち、学習スケジュール等指導をしていく。全員合格を目標とし、最後までフォローをしていく。

近年、私立大学における入試の多様化に伴い、本学においても推薦型による入学者の割合が多数を占めている。これにより、入学前に大規模な学力試験を経験していない学生が増加しており、国試に対して苦手意識を抱えていることが課題。この現状を踏まえ、学生が国試に自信を持って臨めるよう、フォローしていく。

(5) その他質疑応答・ご意見

【山倉様】

就職後のフォローはとても良いと感じる。職場でもフォローを行うが、学校と職場で連携できると心強い。先生方は学生の心の拠り所だと思うので、職場で話せないことが話せることも十分あり得る。情報を共有してもらえると助かる。

【中村】

他大学でも早期退職者が出ていることもあり、大学と企業の連携の必要性を感じる。個々の学生が持つ特性や強みをうまく情報共有し、企業で良いスタートを切ってもらいたい。

【宮山様】

県立の特別支援学校の生徒は、予算を取り、卒業後に3年間は職場を主事が巡回するという就労支援を行っている。

【縄井】

定期的に同窓会の開催が良いのではないかと。皆で集まり勉強会を行うことで、仲間や先生と話すことができれば、学生も安心できるのではないかと。遠方に就職した学生の参加が厳しいところは懸念点である。

【中】

就職先の企業は、採用した卒業生になにかしらの問題があっても、採用した側の責任であると感じ、なかなか大学に相談をしづらい状況がある。高校・大学・職域領域で高大職連携ができると良いのでは。高校と大学での連携は多少あるが、企業との連携ができていない。もう少し職域に特化した大学と地元施設のプラットフォームができればよいと考えている。

【新田】

地元で勉強し、就職したい学生が大多数を占める。県内の高校が安心して学生を大学に送れるよう連携を強めたい。さらに県内の病院と連携し、学生が安心して就職できるよう努めていきたい。

【回答（縄井）】

大学と職域の連携について。OSCE の際に企業の方に来校して頂いたり、企業に学生が伺ったりできると良いのではないかと。

【宮山様】

就職先の方が講義する科目はあるのか。

【回答（縄井）】

授業の中に就労支援はある。しかし、実際に病院で勤務されている先生のお話を聞く機会はあまりないため、カリキュラム改訂の際に展開科目等で導入も考えたい。

【宮山様】

企業が求める人材について、教員にとっても学びとなる。また、学生のモチベーションの向上にもつながる。

【新田】

来年度には高大職連携も射程に入れカリキュラム改訂について検討したいため、またご相談させていただきます。

【大場様】

先週文部科学省から、学士・修士5年一貫制の方針が出された。今後少子化が加速するが、大学数は減少しない現状に危機感を抱いていると思うが、対策は考えているか。

【回答（中）】

元々専門職大学は、通常の大学より10単位程度必要な単位数が多い。さらに学士の2年分の単位数を取得することは、5年間であっても物理的に可能であるのが懸念点である。

導入したことにより、修士の質の担保の困難さと修士全体の評価が下がることも懸念されるため、個人的には学士・修士5年一貫制は本学には拙速に過ぎる印象を持っており、具体的に本学にて検討する段階ではないと考えている。

【浅川様】

同じく当学についてもすぐに検討する段階にはないと感じている。一方で、専門的な領域の学習を深化させるには、現在の4年間という正課カリキュラムのみでは限界がある。そのため、学外活動も必要となってくるのではないかと。そのひとつとして、茨城県理学療法士会の学生会員制度がある。学生会員の資金を活用し、様々な分野の先生方にお話をさせていただいたり、ボランティア保険を利用し、授業にボランティアとして参加していただいたりしている。現在県内5つの学校を含め、この取り組みを検討・実施している。

【中学長】

学士・修士5年一貫制については、特段に優秀な学生の「飛び級」の合法化という考え方が根底にあると解釈している。本学は4年制の中でも「飛び級」の想定は困難であると認識している。また卒業が国家試験の受験資格と同義である現状に対する整合が不明であるため、現状ではすぐに検討できる材料が少ないと判断している。



以上